

事例紹介大学等のプログラム概要【各地域での実施】

〔北海道地区〕

1. 千歳科学技術大学（平成20年度選定）

プログラムの名称	自ら成長する教養人の育成支援プログラム －アナログ・デジタル両手法を活用した成長度に応じた能動的キャリアアップ・人間力涵養システムへの変革
<p>（プログラムの概要）</p> <p>学生にとって、基礎学力・専門知識に加え、職場や地域社会から求められる社会人基礎力を身につけることが本学の教育理念実現への道程であり、教員及び職員の指導・支援のもとに学生自らが能動的に行動し、真の教養人へと成長していくことが重要である。</p> <p>この課題に対し本申請では、在学年次を問わず学生個人の成長レベルに応じて、学生がキャリアアップを図りつつ様々な角度から自分自身を見つめ、社会ニーズを経験を通して理解する機会を与える。併せて個別対応を中心とした学生ニーズの把握とフォローアップによるフィードバックによって、総合的な人間力涵養に向けて成長する教養人として学生を育成することを目指している。</p> <p>具体的には、教職員との対話や社会人基礎力を養う表現力養成講座等のアナログ的手法と、ICT技術を活用した学習指導・支援（学生総合カルテ）やSNS同窓会等のデジタル的手法を併せて活用し、より効果的な学生支援システムへと展開する。</p>	

2. 東京女子大学（平成19年度選定）

プログラムの名称	マイライフ・マイライブラリー －学生の社会的成長を支援する滞在型図書館プログラム
<p>（プログラムの概要）</p> <p>本取組は、図書館を、学生一人ひとりの潜在的な生きる力を引き出し（＝マイライフ支援）、活気に満ちた知的探求の拠点となる「滞在型図書館」＝「マイライブラリー」に発展させ、学習支援のために学生アシスタントを積極的に活用する学生協働サポート体制を整備する。学生はそれぞれのニーズに応じて、図書館内学習支援の利用、図書館以外の学内諸部署と連繋して企画される各種の研修・セミナー等への参加、学生アシスタントからの助言等を選択できる。これら多様なサービスを利用することで、思考力、行動力、コミュニケーション力を養い、社会人基礎力を身に付けることができ、本学が目指す女性のキャリア構築力の育成につながる。また、「支援される立場」から学生アシスタントとして「支援する立場」へとステップアップしていく可能性も期待でき、学生相互の自発的交流を通して、繋がりが合い、啓発し合い、社会人としての資質をも高めることを目指す。</p>	

3. 函館工業高等専門学校（平成20年度選定）

プログラムの名称	携帯を利用した学生インスパイアプログラム －「このままではいけない」と思っている学生たちのために
<p>（プログラムの概要）</p> <p>今日の閉塞社会の中、人間関係が希薄で無気力な学生は増加し、彼らは自ら声を発することなく、その内面に日々蓄積する問題を抱えながら、ついには心の病などに至る事例も絶えない。一方で本校学生相談室の調査によると「このままではいけない」という思いを潜在的に持つ学生は多く、学生が自らを試す機会を与えるべく、学生相談室とキャリア教育センターが中心となって本プログラムの発想に至った。これは学生に働きかける手段として各自の携帯電話を利用し、各種コンテンツやプログラムを発信し、学生が自らの可能性を試す機会を与えるものである。携帯電話は今日の学生にとって最も身近な媒体であり、手許に届く情報には必ず目を向けるはずである。この取組により、閉塞感にとらわれた学生たちが自ら声をあげることを知り、自己啓発を促すことを目的とする。技術者育成を目的とする高等専門学校として、「たくましさ」を育むための学生支援である。</p>	

4. 長岡工業高等専門学校（平成 19 年度選定）

プログラムの名称	長岡高専地球ラボによるキャンパスの国際化 ー小さな高専で広い視野を持った国際人に成長するための学生支援プログラム
<p>（プログラムの概要）</p> <p>急速に進展する産業のグローバル化に伴い、技術者教育には国際性の育成が強く求められている。本取組は、これを学生支援の観点から新たな社会的ニーズと捉え、内外交流の範囲が限られがちな高専生活（小さな高専）の中で、学生が国際人として大きく成長する基盤を養うための支援環境づくり及び教育プログラムの提供を目的とする。</p> <p>具体的には、これまでの本校の学生支援活動及び留学生受入実績を基に、学生の国際性涵養を支援する拠点として地球ラボを設置し、長岡市国際交流協会等の地域団体との連携を図りつつ、留学生と日本人学生との日常的な交流を最大限に引き出し、双方にとって効果的な国際理解環境を創出する。</p> <p>留学生を、支援の受け手から学生全体の国際性を育成する担い手として位置付け、活躍させる点が本取組の特徴の一つである。これにより高専低学年からの国際理解教育の充実、留学生、日本人学生双方の活動による国際性の育成が期待される。</p>	